

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】



vol.
48
2020 SUMMER



筑波大学
University of Tsukuba



2020 SUMMER **TSUKU COMM** vol.48

04 「聴」倉橋節也 教授

08 「TSUKUBA OBOG」橋本千毅 氏

10 「附属学校めぐり特別編」

14 「LIFE 筑波大生」ラチムハリララ・エリソア・アンジさん / 相沢慧さん

16 TOPICS | 21 東京2020オリンピック・パラリンピック出場内定 | 22 リレーメッセージ



人と人との関係から 社会の動きを予測する

今そこにある課題を解決するためのシミュレーション

ビジネスサイエンス系

倉橋 節也

教授

Setsuya Kurahashi

私たちは、意思決定や行動をするとき、自分一人で決めているように思っている、大なり小なり他人からの影響を受けています。人と人との関係の構造が、情報伝達にどのような影響を及ぼすかをモデル化し、計算によって、集団としての行動の変化やリーダーシップの強さをシミュレーションすることができます。このような手法を用いて、組織や社会が現実直面しているさまざまな課題に対して、解決への指針を提案しています。

■人間の行動が招く影響を予測する

人工知能(AI)などを使って、企業や社会に蓄積された膨大なデータ(ビッグデータ)をマーケティングなどに有効活用しようとするデータサイエンスが盛んです。とはいえ、これまでにない新しい事業や戦略を考えるためのデータはそもそもありません。そこで登場するのが、過去の

データを利用しながら将来を見通すシミュレーション、という新しい考え方です。中でも、人々の関係性をネットワーク構造として捉え、各個人の行動パターンをモデル化して、集団全体の振る舞いを予測する「エージェント・ベース・モデル」という手法を中心に、さまざまな社会課題に対してアプローチしています。

社会的課題は規模が大きく、構成要素も多

岐に渡るため、その解決策を実際にあれこれ試してみることは困難です。シミュレーションは、データに基づいて、将来の社会の姿を短時間で予測できるツールになります。人々が互いにどのように影響しあい、態度を変え、行動するかをモデル化することで、その集団内における情報伝達やリーダーシップの様子を計算することができるのです。

■人間の能力が発揮されるために

もちろん、モデル化された人々の行動と、現実世界のそれとが完全に合致するわけではありません。シミュレーションは、正解を求めるよりも、むしろ、意思決定をする際の一助として活用するものです。人間が自らさまざまなデータを処理し、将来を予測する能

力には限界があります。しかし、ある程度の指針が与えられれば、それをもとに考え、よりよい判断をすることができます。敢えて幅のある解釈の余地を残し、人間の力の見せ所をつくっているともいえるでしょう。シミュレーション結果が日々の意思決定に活かされてこそ、モデル化することの意義が生まれます。

どのようなパラメータを使い、どのくらいの抽象度でモデル化するのか、そのさじ加減が研究の面白い部分でもあります。抽象度が高すぎると現実からかけ離れてしまい、低すぎると状況が変化するたびに計算し直さなくてはなりません。適切な抽象度を設定できれば、特定の地域や組織に限らず、汎用的に通用する指針を得ることができるわけ

です。そのための試行錯誤を繰り返す過程で、問題の本質も見えてきます。

■ 感染症対策の効果予測

この手法を使って、新型コロナウイルス感染症対策の効果についてもシミュレーションを行っています。経済活動の縮小や移動の制限などの対策によって、人々がどのような行動をとり、その結果、感染がどの程度広がるのかなど、感染発生初期から、感染源といわれる中国の武漢における全患者約8万人のデータベースを用いて、いくつものシミュレーション結果を積極的に発信してきました。こういった研究結果は、欧米では政策決定にも活用されています。

感染症対策に関する研究は、オランダの大学で研究していた頃に始めたテーマです。最初に取り組んだのはエボラ出血熱でした。ヨーロッパはアフリカに近いこともあり、切実な問題になっていました。そこで、もし感染者が一人でも日本に入国したらどうなるかをシミュレーションしてみたところ、想像以上に深刻な結果が得られたのです。

新型インフルエンザ、SARS(重症急性呼吸器症候群)、ジカ熱、デング熱、風疹など、毎年のように感染症は発生しています。その都度、WHO(世界保健機関)や国立感染症研究所などのデータを分析しますが、感染症ごとに、感染のメカニズムや対策は異なります。蚊が媒介するような場合には、蚊の動きも考慮しなくては

なりません。基本的なモデルは同じでも、使用するパラメータは全く違います。

■ 理系と文系の間に行く

AIやビッグデータと聞くと、いわゆる理系の最先端分野のように思われます。確かに、人間の思考をコンピュータで再現することを突き詰めようとする、難解な数式やアルゴリズムを避けて通ることはできません。けれども、実際の人間の思考はもっともっと複雑です。小説のように文章で表現することはできても、それを数式に置き換えるには、かなり単純化しなければなりません。つまり、同じ事柄でも、複雑な現実の世界に近いほど人文社会科学の領域になり、限定的な仮想世界を扱うと自然科学の領域になるのです。

そう考えると、プログラミングは人文社会科学と自然科学の間にあるものと捉えることができます。複雑な現実世界を、計算可能なレベルに抽象化するのがプログラミングというわけです。とりわけ、組織や社会の課題をシミュレーションするには、コンピュータサイエンスよりも、社会学や心理学など、人文社会科学の知識が重要になります。日本では、コンピュータサイエンスの計算テーマとして社会課題を扱うことが多いのですが、世界的にみると、社会科学系の研究者が、課題解決のツールとしてプログラミングを利用する研究スタイルが主流。プログラミング言語としても、Logo言語という、



もともと小中学生の練習用に開発されたものがベースとなっており、それほど高度な専門性がなくても使いこなすことが可能です。

■ 人の役にたつシミュレーションを

研究の本拠地は社会人大学院(ビジネススクール)。ビジネススクールでは一般に、実務重

視の教育が行われがちですが、筑波大学は研究にも重きを置いています。自らも社会人として学んだ経験から、大学で集中して研究に取り組むことの価値を実感しています。もともとエンジニアでしたが、生物学、社会心理学、歴史など幅広い分野に関心があり、これらも組み合わせた研究を模索していたときに出会ったのが社会シミュレーションという新しい分野でした。

一つの専門性を極めるまでの過程で、知らず知らずのうちに周辺分野の知識もたくさん身につきます。そういった引き出しが増えることは、研究以外の場面でも有用です。

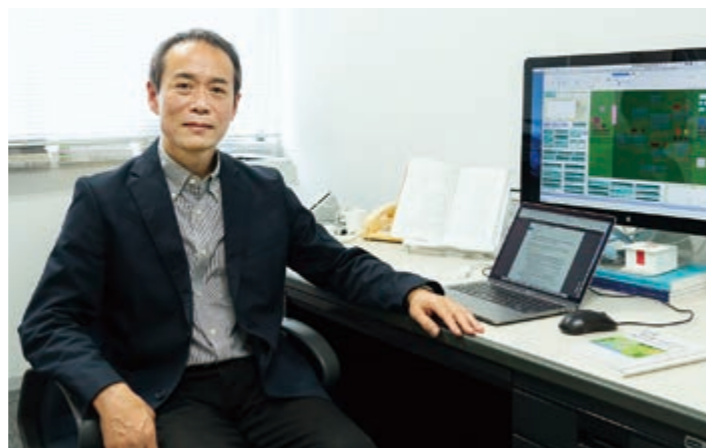
働きながら学ぼうとする学生は、それぞれの職場で現実に直面している課題を抱えて大学院へやってきます。社内の業務効率化から少子高齢化に向けたまちづくりまで、実践的な

テーマが数多くあり、研究者にとっても発見の連続、常に社会の問題と勝負している感覚があります。崇高な研究目標を掲げるよりも、人々が今困っていることを的確に見つけ、タイムリーに解決策を提示することを意識しながら研究に挑み続けます。

筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院 ビジネス科学研究群 経営学学位プログラム 倉橋研究室

社会的課題の解決策をコンピュータ上で実験する社会シミュレーション、経営上の課題をモデル化して実験・分析・予測を行うシミュレーション経営学、金融やマーケティングの課題をさまざまなデータから分析する経営知能情報学、および、企業や社会に蓄積された大量のデータから意味のある情報を発見する人工知能研究に取り組む。これらの研究を通して、社会や経営に関する課題の本質を探るとともに、高度な経営分析スキルを身につけたビジネスリーダーの育成を目指している。

(研究室URL: <http://www.u.tsukuba.ac.jp/~kurahashi.setsuya.gf/>)



PROFILE

くらはしせつや

計測・制御システム関連の民間企業に勤務しながら大学で学び、その後教員へ転身。

1998年 筑波大学大学院 経営・政策科学研究科 経営システム科学専攻 修了

2002年 筑波大学大学院 経営・政策科学研究科 企業科学専攻 修了 博士(システムズ・マネジメント)

2006年 筑波大学大学院ビジネス科学研究科 助教授

2007年 同 准教授

University of Groningen (The Netherlands) 客員研究員、University of Surrey (UK) 客員研究員、科学技術振興機構 研究開発戦略センター 特任フェロー等を経て、2016年より現職。



TSUKUBA



最高の材料、最高の技術、最高のデザインを極める

漆工芸作家
橋本 千毅 氏

漆との出会いを教えてください。

美術系への進学は決めていましたが、大学までは義務教育的な感じがして、自分の意思で選んだという感覚はそんなにありませんでした。美大と筑波のどちらに行くか、というときに、教育大出身だった高校の美術の先生が筑波大の良さを話してくれて、それで筑波大を選びました。

大学では工業デザインを勉強するつもりでした。でもやってみると、職業訓練的な要素が多くて、自分には向いていないとわかりました。それで、暇を見つけては体芸図書館に入

り浸って、美術史、建築、工芸、あらゆるジャンルの本を読み漁りました。芸術系の蔵書がとても充実していて。そんな中で、漆工芸にたどり着きました。

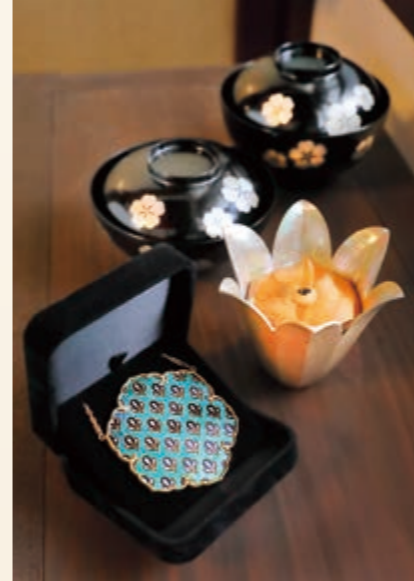
芸術の世界で生かせる自分のアドバンテージは、日本で生まれ育ったことだと思っただけです。当時、国際化が言われるようになっていましたが、日本人が世界に合わせてもあまり評価はされない。だったら、自分がもともと持っている環境や文化の上に積み上げていこうという仕事をしよう、と考えました。

漆にとっての最適な環境は、人間の暮らしに適した温度や湿度と同じです。陶芸のよう

に、日常にはない高温やコントロールしにくい化学反応は使わないので、すべて自分の力にかかっています。そういう、偶然性に依存しないところがいいですね。

どのようにして漆作家への道を拓いたのですか。

筑波大を卒業してから、専門の短大に2年間通って漆工芸を学びました。最初は、器や家具づくりを考えていましたが、素材や技法を学んでいくうちに、蒔絵や螺鈿に惹かれて、芸術作品を作りたいと思うようになりました。



作品作り全てを捧げる一大決心をしてこの道に入ったものの、すぐに軌道に乗ったわけではありません。ただ、人々がネットでいろいろな情報を探す時代になって、田舎暮らしで駆け出しの作家でも、ホームページを作って作品を紹介すると、全国、海外からも注文が来るようになりました。日本の工芸品に興味のある人やコレクターが世界中にいるんですね。最近では、ここも含めて、漆や和紙などの工房を巡る外国人向けの観光ツアーも増えています。

地道に作品を作り続けていたとはいえ、運が良かったのでしょうか。特に自分の場合は、箱やアクセサリなど、手の込んだ装飾品を一点ものとして作りますので、作品として自分の好きなように作らせてもらえるものに限り注文を受けています。完成するまでには1年ぐらいかかりますし、できあがりも基本的にはお任せですから、信頼して注文して下さる方々の支援で、作品作りができていますと思っています。

筑波大で学んだことは役立っているでしょうか。

自分自身はあまり真面目な学生ではなかったんですけど、周囲の友人たちはみんな、しっかりと目的意識を持っていて、すごく刺激になりましたね。漆の世界って、なんとなく職人に



なりたいたい、みたいな人も意外と多いんです。だから余計に、学生時代にそういう人たちに触れることができたのは貴重でした。

工芸の世界では学歴なんて関係ないように思われるかもしれませんが、スポーツのように記録ではなく、主観が判断基準になるので、筑波大卒ということで評価される面は小さくないと感じます。筑波大を出るくらいの方が真剣にやっている、という大学の信用かもしれませんね。

キャンパスをぶらぶら散歩して、ぼんやりとコーヒーを飲んだりしたことを、今でもふと思い出すことがあります。何かを達成したという特別な体験でなくても、そんなふうにごく普通の時間も、今の自分の一部になっていると思います。

これからどんな作品づくりに挑戦したいですか。

実は今、究極の作品にしようと、取り組んでいるものがあります。最高の材料と技術とデザイン、それに技法研究と制作の記録も含めた作品ということで注文をいただき、もう4年ほどかけています。

できあがった作品としては、純粋にその美しさを愛でただけであればよいのですが、そこには、たくさんの知識や技術・技能が詰まっています。それを極めることが自分の作品の価値だと思っています。螺鈿に使う貝ひとつ取っても、産地や生育条件によって微妙に違って、表現に合うものを選ばなくてはなりません。そのデータを集めるだけでも膨



大な時間と労力がかかりますし、論文になりそうな研究的な要素もかなりあるんです。

そういう部分を自分で記録するのはなかなか難しいのですが、ある映画監督が、この制作過程をずっとドキュメンタリーとして取材してくれています。これも縁に恵まれました。今のところ、思ったような作品ができつつあります。

筑波大で学ぶ後輩たちにエールを。

若い世代の方が情報も持って賢いし、正々堂々と生きているように思います。社会的な条件が整っているということもあるでしょうが、概して優秀です。でも、まだ大学生までしか生きていない。なんとなく自分が今いるところがゴールのように感じてしまっていますが、大学は通過点に過ぎません。偉そうなことは言えませんが、ちょっと遠くを見ながら、それでも全力で駆け抜けてください。



PROFILE はしもとちたか

1972年 東京都生まれ
1995年 筑波大学芸術専門学群卒業
高岡短期大学・富山大学助手を経て2006年漆芸家として独立。現在富山県富山市に工房を構える。個展・グループ展など国内外で多数。ドイツ在住の映画監督東美恵子氏による自身の制作活動を追うドキュメンタリー映画を撮影中。2020年7月よりパナソニック汐留ミュージアムで開催の「和巧絶佳展—令和時代の超工芸」に出展作家として選ばれた。2021年ミュンスター漆芸美術館の企画展に出品予定。

附属学校 めぐり 特別編

各学校の特色を生かした新しい 教育スタイル



聴覚活用および口形を併せて情報を得る学生に配慮した機の配置とフェイスシールドを着用しての授業風景(附属視覚特別支援学校)

新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い、全国レベルで最初に取られた具体的な措置が、2月末からの「小中学校、高校、特別支援学校の休校」でした。新学期に入って、大学ではオンライン授業が続く一方で、小中学校、高校、特別支援学校は徐々に再開されましたが、かつてと同じように学校生活を送ることが難しい状況が続いています。そのような中で、これまで以上に児童・生徒の学習や生活を支えていくべく、各附属学校では、それぞれの特色を生かした新しい教育スタイルを模索しています。



手作り水場で校舎に入る前に手を洗います(附属中学校)

附属小学校

2月28日から5月末日まで臨時休校を続けてきましたが、東京都の緊急事態宣言の解除に伴い、6月1日から「1日1学年の登校」に絞っての分散登校をスタートさせました。

登校に当たっては、児童の密集・密接を避けるべく登下校時の動線を明確に分離するとともに、大教室を授業会場としました。また、入構時の検温や健康観察、職員から児童への感染防止のためにフェイスシールドも使用

しています。

実際の授業においては、子ども同士の距離をとること、全員同じ方向を向くこと、話し合い活動を避ける、物品の貸し借りはしない等、様々な制約を受けてはいますが、教職員の工夫により、楽しい授業が展開され、子どもたちも久しぶりの授業に喜んでます。

附属中学校

休校中は、学校全体が連携し、オンライン

等を活用した双方向の教科指導、HR(ホームルーム)活動、健康指導等を実施する体制を構築して教育活動に取り組みました。

教科指導及びHRについては、3週間を見通した指導・評価計画を1週間単位で作成し、生徒が時間割を自由に決めて、計画的に学習に取り組む方式としました。

生徒は、苦手な教科をじっくり学習することもできれば、毎日動画を見ながら体を動かしたりすることもできます。「質問カード」をいつでも提出できるので、先生が個別に回答をしたり、全体で共有したりすることもできます。個別のサポートと全体へのフィードバックを行うことができる、双方向の学習支援となっています。

また、Zoomを活用した学級会や質問タイムも実施し、集団づくり、居場所づくりを行うほか、保護者会も開催しました。

附属高等学校

4月11日よりオンライン授業を開始しました。その後、生徒へのアンケートの結果、生活習慣の乱れが心配されたことから、4月22日より保健体育科による「朝体操」の配信を開始しました。さらに、5月7日からはオンライン時間割を組んで、それに沿ってZoomによるライ

ブ授業、動画配信、テキストベースでの課題の提示等を行ってきました。6月1日からは、段階的に登校を開始しておりますが、当面は、午前:オンライン授業、午後:対面授業というように、オンライン授業と対面授業の併用が続きます。

本校では、2019年度まで指定されていたスーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)の時代に、校内のITC環境の整備やGoogle Classroomの使用などがすでに進んでいたため、早期に上記の取り組みを開始することができました。

校内での取り組みにとどまらず、本校では、5月30日に「G Suite for Education & Zoomを活用した『オンライン授業』研究会」を主催し、この研究会は参加者200名超の盛会となりました。

附属視覚特別支援学校

幼稚部から職業教育課程の専攻科まであり、今年度は165名の幼児・児童・生徒が在籍し、84名の生徒が寄宿舎を利用しています。

学校再開に向けて、感染防止対策を取りまとめ、手洗い・アルコール消毒の徹底、3密

回避の授業内容や動線の見直し、行事の縮小・延期、時間差を設けた食堂利用など、その対策は多岐に渡っています。寄宿舎では、感染へのリスク軽減と万一の対応に備え、ゾーニングの設定、防護服着用でのシミュレーションなどを行いました。

休校期間中は、学習保障のためにオンラインによる取り組みを一部導入して、お互いの顔や声がわかるホームルーム活動や、動画提供による学習を行いました。学校再開後も、遠隔支援の充実に向け、オンライン学習によるオリジナルコンテンツの作成、アクセシビリティを考慮したICTの有効活用を進めていきます。

附属聴覚特別支援学校

幼稚部から高等部専攻科までの幼児児童生徒が在籍することから、各学部・学科の発達段階に応じた学習支援を行いました。

まず、電話(ビデオ通話を含む)やメール等で子どもたち、保護者とのつながりを保ちました。通信環境調査を行い、課題は紙ベースで送付したり、従来から使用しているタブレット用授業支援アプリを利用して学級会を行ったりと、教材配信や生徒の課題提出に利用した



入構時の検温の様子(附属小学校)



凸線で足裏からわかる停止位置(附属視覚特別支援学校)

各学校の特色を生かした新しい教育スタイル

附属学校めぐり 特別編



教室でのオンライン授業の様子(附属坂戸高等学校)



水田学習継続のため、田植えを行う教員(附属駒場中・高等学校)



オンライン授業の様子(附属久里浜特別支援学校)

附属坂戸高等学校

4月13日から毎日3コマの授業をスタートさせました。本校ではいち早くBYOD(Bring Your Own Device)を導入していたので、スムーズにオンライン授業を始めることができました。6月からの分散登校期間も登校と自宅でのオンラインのハイブリッド対応で学習を進めています。また登校の際、「密」を避ける方法や、日々の環境衛生維持のための準備

を実施しているところです。本校の教育の中心でもある、協働しながら学ぶ環境を整えるのはしばらく難しいですが、今ある環境でどのように学習を進められるか、初めての課題解決に学校をあげて真剣に取り組んでいます。

附属駒場中・高等学校

6月3日から分散登校を開始しました。休校期間中は、学習面、生活面ともにオンラインで

の支援が行われました。学習面では、全教科でGoogle classroomが開設され、Google meetやZoom等の同期型や、G suite等を介した配信型の授業が行われました。生活面では、HRや健康観察が定期的にオンラインで行われました。また、電子図書館が開設されて、電子書籍の閲覧や貸出圖書の予約ができるようになり、郵送による貸出サービスも展開されました。オンライン学習支援は、学校が再開した後も継続して実施する予定です。

筑駒の取り組みは、オンラインだけではなくありません。開校以来74年間行ってきた水田稲作実習は本校の伝統です。この水田学習を継続するために、5月に本校教員によって、耕起、代掻き、田植えが行われました。秋には生徒によって稲刈り、脱穀等が行われる予定です。

附属大塚特別支援学校

5月の臨時休校中よりZoomを活用したオンライン授業を行っています。幼稚園から高等部までの各クラスで、ホームルーム等の活動を中心に行ってきました。6月からは分散登校となりましたが、Zoomを活用したオンライン授業は、引き続き行われています。

例えば幼稚部では、親子参加型の「あつまり」を行っています。画面越しに紙芝居に注目をしたり、教員の動きの真似をしたりする様子が見られます。また、小学部では「朝の集まり」の中で、運動(ラジオ体操やエアロビクスなど)も行っています。児童が主体となって司会進行をし、画面を通して友達と双方向で対話する様子も見られます。発達段階や生活年齢に応じた「新しい様式」の授業が、特別支援学校においても展開されつつあります。

附属桐が丘特別支援学校

臨時休校期間中の5月7日から28日までの間、小学部から高等部の各学級で、「生活リズムを整える」「学習の保障」を目的にして、「桐が丘オンライン学校」を行いました。学級ごとの朝の会から始まり、各教科、体育や自立活動も実施しました。機器やアプリの操作に苦戦したり、保護者の方々にお手伝いいただいた場面もたくさんありましたが、画面越しとはいえ、友達や先生に会えた喜びを感じている子供たちがたくさんいました。1つの授業につき、オンラインで学習する時間とオフラインで自習課題をする時間

を設けるなど、時間の使い方を工夫しました。4月の入学式はできませんでしたが、新入生もオンライン上で顔を合わせた新しい友達と出会うのがとても楽しみになったようです。

附属久里浜特別支援学校

休講期間中は、歌、運動、生活に関すること、絵本の読み聞かせ等の動画を作成してネットワーク上で観ることができるようにし、必要な家庭にはDVDを届けて、観てもらおうようにしました。また、Zoomを活用し、保護者の

協力を得ながら、幼児・児童と対面して健康状態を確認したり、個々の実態に応じた指導を行ったりしました。保護者面談や職員会議等にも利用しました。

6月1日からの学校再開に向けて、使用する学級を限定する形で、学校を思い出してもらうために校庭や広場を開放しました。

また、休校期間中、子供たちの生活を支える場となっていた放課後等デイサービスの事業所(6か所)にも校庭や広場を開放し、子供たちのストレス発散に役立ててもらいました。



「朝の集まり」での運動(附属大塚特別支援学校)



小1ズーム朝の会(附属桐が丘特別支援学校)

Zoom、Google Meetはオンライン会議アプリです。G suiteは、Googleが提供するクラウド型グループウェアサービスで、Google classroomは教育用ウェブサービスです。

LIFE

筑波大生



マダガスカルで日本語を教えたい

日本で好きな食べ物はたこ焼き。コロナ禍が落ち着けば、沖縄を訪ねてみたいと考えている。

Ratrimoharilala Elisoa ANDRY



宇宙を身近な存在に

映画のアイアンマンシリーズが好き。ものづくりに理想的な環境が描かれているからだ。

Kei AIZAWA

写真:STEP提供

人文社会ビジネス科学術院
人文社会科学研究群(博士前期課程)
国際日本研究学位プログラム1年

ラチムハリララ・エリソア・アンジ さん

ラチムハリララさん(以下アンジさん)はマダガスカル首都、アンタナナリボの出身だ。大学の日本語教師になるという夢を叶えるため、昨年9月に来日した。

今年4月からは本学の国際日本研究学位プログラムに在籍し、小野正樹・人文社会系教授(言語学)の研究室に入った。「マダガスカル人日本語学習者の発言の認知プロセス」をテーマに、研究を進めている。

アンジさんと日本語との出会いは、国立アンタナナリボ大学入学後のこと。マダガスカル語と英語を専攻したが、第2外国語として日本語を選択したことがきっかけだった。



昨年秋の筑波大学学園祭(雙峰祭)にて

勉強に役立つと友人から紹介された日本のコミカルな学園ドラマ「メイちゃんの執事」をみて、その面白さに引き付けられた。日本語・日本文化をもっと知りたい。そう強く願うようになった。マダガスカル人にとって日本語は、発音がしやすいことも後押しとなり、専攻を日本語に変えた。

本学を留学先に選んだのは、海外での日本語教育の実績があったからだ。来日し、「日本はテクノロジーが進んだ国だが、その一方で、着物など伝統的な文化も守っている。それが素晴らしい」と改めて感じている。

2年前に結婚した。夫のパラニさんとの出会いも、日本語がとりもった。

パラニさんはアンタナナリボ大学の1年後輩。日本語を学ぶ学生は1学年に数十人ほどいて、パラニさんは日本語学習者としては先輩だった。アンジさんが現地で開かれた日本語スピーチコンテストに参加する際、いろいろと助言を受け、仲が深まったという。

実はパラニさんも昨秋から1年間の予定で大阪大学に留学している。SNSの通話サービ

スを利用した2人の会話は、日本語しか使わない時もある。語学向上のためだ。

「彼の方が1年早く帰国するので……」と、アンジさんは残念そうに、はにかむ。

アフリカ大陸沖に浮かぶ島国・マダガスカルは生態系のホットスポットと呼ばれ、キツネザルやカメレオン、バオバブの木など、固有種が多い。そのため、日本を含む世界各国から、エコツーリズムの舞台として注目されている。円借款で港湾整備を支援するなど、日本は主要な経済援助国の一つでもある。

マダガスカルと日本との交流は今後、さらに深まっていくことだろう。アンジさんたちのような存在が、その礎となることは間違いない。



後輩にひとこと
自分の夢が叶うまで、あきらめずに、努力を続けてください。私はマダガスカルで日本語教師になるという大きな夢があります。夢があるからこそ、頑張ることが出来ます。

相沢さんが代表を務める学生団体「筑波大学宇宙技術プロジェクト」(STEP)は今年2月、茨城県沖80kmに浮かぶ作業船から小型ロケットを打ち上げる実験に成功した。

学生団体の洋上打ち上げ成功は国内初の快挙。計測機器の故障で正確な値は不明だが、ロケットは学生団体の日本記録(3160m)を上回る高度約4kmに達したとみられる。

「学生のロケット打ち上げ拠点として、洋上も選択肢になることが示せた。未来につながる結果だ」と相沢さんは笑顔を見せる。

射場の作業船を提供したのは茨城県の支援を受けた宇宙ベンチャー企業「アストローション」(東京)。同社は洋上の活用で、増大する小型ロケットの打ち上げ場所の確保を目指

後輩にひとこと
夢や目標を持つてほしい。それが決まれば叶えるためにどうすればよいかが見えてきます。筑波大にはいろいろな目標を持つ学生がいて刺激になるし、先生たちの研究も多彩で、とても恵まれた環境です。



理工学群工学システム学類2年 相沢 慧 さん 筑波大学宇宙技術プロジェクト(STEP)代表

している。STEPに昨秋、協力要請があり、今回の打ち上げにつながった。

STEPは2006年、工学系の学生が集まって設立された。現在は理工系学生23人が参加し、ロケットや超小型衛星の設計や製作、ロケットと地上との通信システムの開発などに取り組む。活動資金は会費のほか、卒業メンバーからの寄付や茗溪会の支援などで賄っている。

相沢さんが宇宙に興味を持ったのは小学生の時。小惑星探査機「はやぶさ」の活躍に感動したのがきっかけだ。STEPで宇宙に関するものづくりがしたいと思ったことも、筑波大に進学した理由の一つだという。

STEPでは代表の他、機体の設計なども担当する。打ち上げたロケットは全長2・85mで、STEPとしては最大級だった。

「地上での打ち上げなら、発射直前まで機体の整備ができるが、洋上打ち上げでは機体を船に載せるまでしか作業できない。打ち上げ時に機器が正常に作動するよう調整するのが難しかった」と振り返る。

計測機器などが故障したが、「洋上への第

一步としては上出来。改善点を見つけ、できるだけ早く学生の打ち上げ記録を正式に更新したい」と、あくまでも前向きに考えている。

代表として多くのメディアの取材を受ける中、学生ロケット団体の存在を広く知ってもらうことを心がけていた。広報役としての経験も、今後のものづくりに生きるはずだ。

宇宙をより身近な存在にすることを将来の夢に掲げる。「宇宙は手が届かない場所ではなく、私たちの生活圏の一部になる。自分も、そのための力になりたい」。

その実現に向け、相沢さんは着実に歩みを進めているようだ。



打ち上げ前日の機体組み立てに笑顔で臨む(写真:STEP提供)

筑波大学の新型コロナウイルス感染症防止対策 (2020年6月末現在)

新型コロナウイルス感染症は、今年に入り世界中で蔓延、拡大し続けており、終息のめどは見えていません。こうした中、本学では、1月29日付で「新型コロナウイルス感染症リスク対応チーム」を発足し、卒業式の規模の縮小、入学式の中止、附属図書館の臨時休館、課外活動の中止、テレワークの推進等のさまざまな対策を講じてきました。

さらに、4月16日付で政府による緊急事

態宣言の対象地域が全国に拡大され、茨城県が「特定警戒都道府県」に指定されたことを受け、授業、研究、学生の入構、課外活動、学内会議、事務体制の活動形態を周知し、新型コロナウイルス感染症の更なる感染拡大防止を図っています。

なお、5月25日の政府の緊急事態宣言の全面解除を受け、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた活動形態を

6月19日から一部緩和していますが、学生・教職員に対しては、引き続き感染拡大の防止を徹底し、一人ひとりの基本的感染対策として、「新しい生活様式の実践例」(新型コロナウイルス感染症対策専門家会議(令和2年5月4日))にある感染防止の3つの基本「身体的距離の確保」、「マスクの着用」、「手洗い」を実践するなど適切な行動を求めています。

※最新情報は、本学HPを確認してください。

新型コロナウイルス感染症への対応(まとめ)：

<http://www.tsukuba.ac.jp/about/antisaster/covid-19-list.html>

学長メッセージ(学生向け)：

<http://www.tsukuba.ac.jp/news/n202004071055.html>

新型コロナウイルス感染症対策に係る対応のガイドライン：

<http://www.tsukuba.ac.jp/news/n202004011157.html>



学生のいないキャンパス

■ 本学の活動形態 (令和2年6月19日現在)

授業	オンライン授業のみとする。
研究	感染拡大防止に留意して研究活動を行う。 セミナー・ゼミ等はオンラインでの実施を推奨し、構内の滞在時間をできるだけ減らす。
学生の入構	感染拡大防止に留意して、通常通り入構できる。 ただし、不必要な入構は控える。
課外活動	団体での課外活動(小規模な活動を含む)を自粛する。 ただし、感染拡大防止を図りながら行う個人活動のみ可能とする。
学内会議	可能な限りオンラインで行う。 ただし、緊急性を有するもの又は対面で行う必要性が高いものについては、感染拡大防止策を講じ、対面会議を可能とする。
事務体制	在宅勤務及び時差出勤を活用する。



2019年度卒業式の様子



■ 大学全体の対応

- 3月25日 2019年度卒業式・大学院学位記授与式を縮小して開催
出席者は、各学群・学類・研究科からの代表者(学位記受領総代、謝辞総代、学生表彰者等)のみとした。
- 3月26日 2020年度学年暦カレンダーを改正
春学期は4月27日からオンラインでの授業を開始した。
- 4月 1日 「新型コロナウイルス感染症対策に係る対応のガイドライン」を公表
- 4月 5日 2020年度入学式・大学院入学式を中止
- 4月 6日 在学生、新入生に向け、学長メッセージを発信
- 4月 9日 課外活動の全面自粛を要請
- 4月17日 「緊急事態宣言対象地域の全国拡大に伴う本学の対応について(要請)」を発信
本要請に基づく今後の本学の活動状況(「授業」「研究」「学生の入講」「課外活動」「学内会議」「事務体制」)を示した。
- 4月21日 附属図書館の全館臨時休館
- 5月 7日 2020年度受験生のための筑波大学説明会(オープンキャンパス)をインターネットを活用した実施方法へ変更
- 6月10日 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた活動形態の変更について」を提示(6月19日より発効)



中央図書館 一部利用禁止区域



感染防止パーテーションを設置営業する学食

在学生に対する心のケア

学生相談室では、学生生活に関する全般的な相談に対応しています。通常は、相談室で対面での相談を実施していますが、現在は、オンラインや電話による遠隔相談が主になっています。

5月に入って、オンライン授業が続いていることによる疲労感に関する相談が増えました。特に新入生からの相談は深刻で、通常は、友達に相談したり、先輩に聞いたりしながら乗り切ることができますが、友人関係を築く機会もなく、実家で、あるいは一人づくりにやってきて、ひたすらに授業を受けているようでした。厳しい受験

を乗り越えて大学に入った意味がわからない、もう何もかもやめたい、といった悲痛な相談も入り、保護者の相談も日に日に増えました。

一番の問題は学生が感じている孤立感です。物理的には離れていても、誰かとのつながりの感覚を取り戻すための工夫が必要です。高校時代までの友人たちに声をかけてみる、家族と散歩に出かける、などの提案に応じて連絡を取ったり、担任の先生たちが個別に声をかけてくれたり、先輩たちがオンライン上の交流の場を作るなどの支援を通して、話せる仲間を見つけた人もいたようです。

社会的距離の時代は今後も続くと思われ、心理的つながりをどのように保つか、大きな課題となります。引き続き、学生たちの生の声を聴く最前線として、活動を続けていきます。

感染症対応の状況にあわせて、相談体制を組んでいます。

詳しくは下記を確認してください。

学生相談室：

<http://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/sodan.html>



学生緊急経済支援金の支給

保護者の収入減による仕送りの減少、アルバイト先の休業等による収入の減少、オンライン授業による環境整備の支出の増加等で困窮する学生のための緊急経済支援対策として、

支援金を支給しました。

この支援金の財源確保のために、大学ホームページやクラウドファンディングを活用して寄付を募りました。教職員をはじめ卒業生や企業

など、本学を応援してくださる多くの方々から支援が寄せられ、希望する約9,800人の学生に、総額約3億6千万円を支給することができました。

支援内容	人数	金額(円)
全学群生(一律15,000円・自宅外生はプラス15,000円)	8,743	235,665,000
留学生(私費留学生・一律120,000円)	983	117,960,000
元留学生(帰国困難者・一律120,000円)	23	2,760,000
一時貸付金(全学生・上限100,000円・無利子)	135	12,168,000
合計	9,884	368,553,000

*令和2年7月9日現在

キャリア・就職支援

新型コロナウイルスの影響で、就活イベントが相次いで中止・延期となり、企業説明会や面接・面談がオンライン化されるなど、これまでに経験したことのない状況に、学生から戸惑いや不安の声が上がっています。

ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリア(DAC)センター／学生部就職課では、少しでもこういった不安を解消できるよう、次の支援に取り組んでいます。

●電話とオンラインでの個別キャリア相談

●オンラインでイベント開催

・OB・OG質問会(4月～5月)

・オンライン企業説明会(6月)

・OB・OGキャリアカフェ(7月) など

●各種ガイダンス、インターンシップ対策などの今知りたい情報を動画で提供

OB・OG質問会に参加した学生からは、「ネットだけではわからない、実体験に基づく、

リアルな業界や仕事のことを知ることができた」「オンラインだからリラックスして参加できた」などの感想が寄せられました。

最新情報は、下記をご覧ください。

就職課：

<https://syushoku.sec.tsukuba.ac.jp/career/>



入試に関する情報発信

アドミッションセンターでは、本学の概要や学内関連施設を紹介する動画、大学案内や各学類・専門学群のパンフレット等を掲載するとともに、Zoomを使用してオンライン進学相談を行う「WEBで見る進学説明会」ページを公開しています。

今後は、本ページに各学類・専門学群を紹介する動画を掲載し、受験生からの疑問・質問にリアルタイムで答えるAIチャットボットを導入

するとともに、説明会や模擬授業等のLIVE配信を行う等、内容を充実させた上で、インターネットを利用したデジタルオープンキャンパス「2020年度 受験生のための筑波大学説明会(夏のオープンキャンパス)」を、8月下旬に実施する予定です。

インターネット環境があれば、筑波キャンパスに来校することなく、いつでもどこからでも下記より参加することができます。

WEBで見る進学説明会：

<https://ac.tsukuba.ac.jp/haruno-tokusetsu>



2020年度 受験生のための筑波大学説明会(オープンキャンパス)：

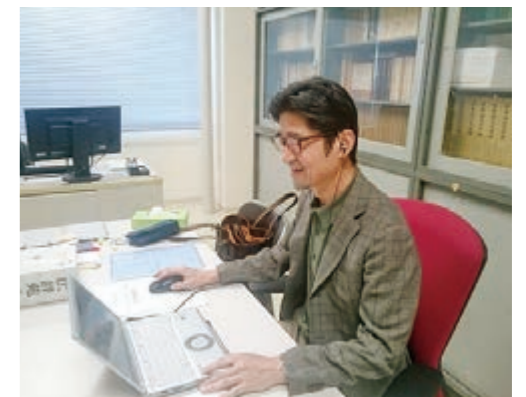
<https://ac.tsukuba.ac.jp/opencampus>



また、入学者選抜に係る重要なお知らせ(新型コロナウイルス感染症に関連する入試情報を含む)については、大学Webサイトに随時掲載しています。

学群・学類入学案内 お知らせ：

https://www.tsukuba.ac.jp/admission/undergrad/news_undergrad.html



オンライン進学相談を実施中

研究を通じた社会貢献

4月初めには研究現場でも、大きな混乱が予想されました。「研究」という活動を考えるとき、「新型コロナウイルス=仕事を妨げるもの」と捉えられがちです。URA研究戦略推進室では、世界規模で広がる新型コロナウイルスによる危機的状況への対処に貢献するため、学内のあらゆる分野の専門家が研究力を発揮し、課題解決に取り組むことをバックアップする学内公募型研究資金「新型コロナウイルス緊急

対策のための大学「知」活用支援プログラム」を立ち上げ、短期集中型、中期型の二種の研究期間を設けて応募を開始しました。緊急かつ2週間という短期間の公募にも関わらず、医学・生物学研究、数理解析、教育維持、児童・高齢者・留学生・アスリート・障がい者支援、社会政策、経済対策、インフォデミック対処、国際協力・比較、芸術振興などの幅広い分野から69件もの応募が寄せられ、短期集中

型18件、中期型9件が採択されました。今後は、下記サイトにおいて、随時、これらのプロジェクトの情報を発信していきます。

筑波大学「知」活用プログラム：

https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19/



花粉の通り道は柔らかい組織に包まれている

「ペクチン」という物質名に聞き覚えはあるでしょうか。果物や野菜に含まれる天然の多糖類で、ジャムやゼリーなどの食感を改良する増粘剤として広く用いられています。生命環境系の岩井宏暁准教授は、このペクチンが、植物の種子ができる仕組みの中でとても重要な役割を果たしていることを突き止めました。

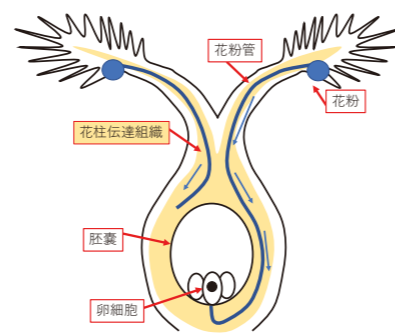
植物の種子が作られるためには、花の雄しべの柱頭に受粉した花粉が胚嚢に届いて、精細胞と卵細胞が受精するプロセスが欠かせません。このとき、雄しべの中を花粉管が伸びていきますが、その通り道となっている部分（伝達組織）には、花の中でも特別に多くのペクチンが含まれていることがわかりました。そのために非常に柔らかく、花粉管がスムーズに通ることができ

るようになっているのです。

ペクチンは、メチル基が結合すると柔らかいゾル状ですが、メチル基がないと、カルシウムと結合して硬くなるという性質があります。植物には、ペクチンメチルトランスフェラーゼという酵素があり、メチル化ペクチンを合成して、細胞壁を柔らかくする働きをしています。そこで、岩井准教授は、この酵素の遺伝子 *OsPMT16* を欠損したイネをつくってみました。すると、花粉管の通り道となる柔らかい伝達組織がほとんど形成されず、そのために、このイネは種子をつくることができませんでした。

メチル化ペクチンが、種子によって植物が存続していく上で不可欠であることがわかりましたが、見方を変えると、わざと種子をつくらな

くすることもできるわけです。柑橘類などの果物で、種子のない品種を開発したり、遺伝子組み換え作物が不用意に拡散しないようにするなどの応用もできそうです。



雌しべの柱頭についた花粉は、花粉管を伸ばして柱頭の中に入りこむ。さらに通り道である花柱伝達組織の中を下に伸びて胚嚢に到達します。花粉管の中の精細胞は卵細胞と受精し種子を形成する。

「ささやきの回廊」現象を利用した偽造不可能な光認証デバイス

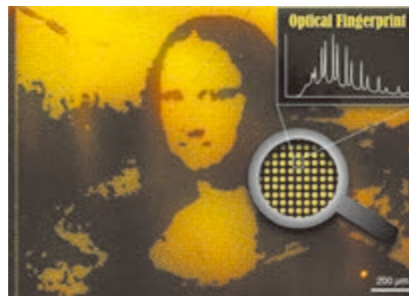
ロンドンのセントポール大聖堂には、直径約34メートルもあるドームの内側をめぐる回廊があります。この回廊でささやくと、その声が円形の壁を反射しながら伝わるために、音波が増幅され、回廊の反対側にいる人にまではっきりと聞こえるという現象が、「ささやきの回廊 (WGM)」としてよく知られています。これと同じ現象が、マイ

クロメートルサイズの小さな球体の中でも起こります。音波を光に置き換えますが、光の波長は数100ナノメートル程度なので、このような小さなスケールの球体内部で光が増幅されます (WGM共鳴発光)。

このときの光のスペクトル波形は、マイクロ球体のサイズや材質によって変化します。数理物

質系の山本洋平教授は、立教大学、物質・材料研究機構と共同で、発光のオン／オフが可能な物質を使ったマイクロ球体を作成しました。これは、酸化型ジアリールエテン (DAE) という物質でできています。DAEは紫外線照射により黄色に発光し、これに可視光を照射すると消光する性質があります。また、溶液中で容易に直径数ミクロンの球体を形成します。これに光を照射してみると、サイズや形がわずかに異なるため、球体ごとに固有のWGM共鳴発光スペクトルを示すことがわかりました。球体が指紋をもっているようなものです。

基板上にこの球体を並べたアレイを作り、特定の部位に光を照射することで、マイクロサイズの絵を描くこともできます。このようにして作成した絵は、一見同じように見えても、スペクトルパターンが異なることから、それぞれを識別することが可能です。事実上、偽造不可能なデバイスが実現しました。



開環型DAEからなるマイクロ半導体アレイに対し、フォトマスクを用いて描画した蛍光顕微鏡写真 (Materials Horizons誌の裏表紙絵として採択)

東京2020オリンピック・パラリンピック出場内定

来年に開催延期となった東京2020オリンピック・パラリンピックについて、本学在学生の人間総合科学学術院1年 梶原悠未さん (自転車競技)、人間総合科学学術院1年 高橋利恵子さん (ゴールボール)、体育専門学群4年の瀬立モニカさん (パラカヌー) が出場内定を獲得しました (6月30日時点)。そのうちの2名に、現在の練習状況や大会に向けた心境を語ってもらいました。

人間総合科学学術院人間総合科学研究群 (博士前期課程) 体育学学位プログラム1年

梶原 悠未 さん ● 出場予定競技: 自転車競技 トラック 女子オムニウム・女子マディソン



現在は東京オリンピック会場の近く、静岡県伊豆の国市を拠点に、日本代表チームでの練習と個人で独自に考えた練習を取り組みながら、来年の東京2020オリンピックに向けて練習に励んでいます。

1年延期になったことで、強くなる時間が増えたと前向きに捉えることでモチベーションを高く保ちながら、日々、限界を決めずに取り組んでいます。

大会がない状況だからこそできる練習もあるのではないかと、練習内容を全て見つめ直しました。

また、大会への調整の仕方でも練習すべきだと気づき、自分で、自己大会を設定し、目標を決めて取り組むことを実施し、練習の質と強度を高く保ち、練習の自己ベストを更新することに挑戦しています。

また、目標を期日までに達成できなかった種

目においては、課題や反省から練習内容を組み立て直す事も出来ています。

このように、大会が延期、中止になっている状況でも、練習を工夫することで、1年後の東京オリンピックをより一層強くなった梶原悠未で迎えられるよう、精一杯準備していきます。

2020東京オリンピックでは、自転車競技トラックの女子オムニウムにおいて、必ず金メダルを獲得します!

体育専門学群4年

瀬立 モニカ さん ● 出場予定競技: パラカヌー



昨年12月より沖縄県大宜味村で合宿を行っており3月にパラリンピックの延期が決まりました。

4月まで沖縄で合宿をする予定でしたが、緊急事態宣言と共に沖縄に残る判断を下しました。県外の移動自粛が解除されてからは石川

県の小松市市場潟カヌー競技場でずっと合宿をしています。延期が決まった当初は前向きに捉えていたのですが、いざ国内や国際大会の中止が決まるとやはりモチベーションを保つことが難しい時期もありました。しかし目標に向かって努力することがアスリートの仕事でもあり

ます。現在は2021年の東京パラリンピックに気持ちを切り替えて「いま」に集中して練習を行っています。そして来年の東京パラリンピックでは地元「江東区」で皆さんと素晴らしい時間を共有出来るようメダル獲得に向けてこれからも精いっぱい練習に励みたいです。

ツクバでツナがるリレーメッセージ

5000人を超す教職員がいる本学。

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。

BATON

01

医学医療系
奈良坂俊明さん



筆者中央(ベトナムでの内視鏡指導)

内視鏡で国際交流

筑波大学に赴任して早9年になります。それまでの大きな違いはとてグローバルだということです。国外から医学生や医師がたくさん研修に来ますし、私自身もベトナムへ3回、ブラジルへ2回ほど内視鏡治療の指導に行かせていただきました。正直英語はあまり得意ではないのですが、つたない英語で何とか乗り切ってきました。新型コロナウイルスの影響でしばらくは国際交流も難しくなっていますが、再開される日に備えて今こそ英語の勉強をしておこうと思います(思うだけになってしまいそうな気がしますが…)

NE XT 次回は、病院総務部の深谷めぐみさんです。「海外出張の際にとてもお世話になっています。細かな調整などして頂き、まさに国際交流の架け橋です。」

筑波大学で働き始めて3年目になりました。自然豊かで多様性のあるキャンパスと、自由な雰囲気が気に入っています。部署柄、学生と接する機会も多く、学生から元気と刺激をもらっています! 就職課では今年度より、キャリア教育の一環として本学独自の「地域連携型インターンシップ」を開始しました。学年問わず1年生から参加可能なインターンシップです。そのほかにも志望別、ニーズ別のイベント等を開催しています。働く姿をイメージする機会の創出や情報提供を通して、学生が納得したキャリアを歩めるよう支援していきたいと思っています。

BATON
05

学生部
十塚伊代さん



筆者右から2人目

学生のキャリアを応援

NE XT 次回は、医学医療系エリア支援室の加藤光波さんです。「昨年度まで同じ学生部でお世話になりました。明るく元気で笑顔の素敵な方です!また一緒にお仕事できる日を楽しみにしています!」

経済産業省への出向から筑波大学に戻ってきました。大学のリサーチ・アドミニストレーター(URA)としては他大学で2012年から勤務して、筑波大学には着任して8年目を迎えました。仕事柄、他大学のURAやつくば地区の研究機関の方とも一緒に仕事をする機会も増えました。特につくば地区の方とは、季節ごとに食事に出かけたり夏はBBQをしたりして、親睦を深めています。異動や転職があっても引き続き集まれる仲間が出来て大変嬉しく思います。現在は外出自粛中ですが、このメンバーで集まれる日を待ち望んでいます。

仲間が増えました!



筆者上段左から3人目(2018年3月撮影)

BATON
02

URA 研究戦略推進室
森本行人さん

NE XT 次回は、生命環境系の鶴田文恵さんです。「着任時より焼肉を頻繁に(?)食へに行っていて、仲良くしていただいています。」



筑波大学の中には、カフェが何カ所もあります。サザコーヒー筑波大学アリアンサ店は2018年にオープンして、今では、学内外からのお客さんと賑わっています。緑豊かなキャンパスを眺めながら、ブラジルのアリアンサ農園×サザコーヒー×筑波大学トリプルコラボのアリアンサエステートコーヒーがいただけます。そもそも私が日常的にコーヒーを飲むようになったのは、筑波大学のブラジルでの活動に関わるようになってからですが、今では日常に欠かせないものになりました。アリアンサ農園スタイルの濃厚な練乳プリンもおすすめです。

コーヒー好きになりました

BATON
06

医学医療系
福重瑞穂さん

NE XT 次回は、国際室の島田正子さんです。「国際関係のイベントポスター・グッズなどのデザインを一手に引き受けて、いつも格好良く仕上げてくださいます。」

BATON
03

アスレチックデパートメント
山田晋三さん



筆者中央(野球部ホームゲーム2019@牛久運動公園野球場)

スポーツで貢献を

筑波大学アスレチックデパートメントはスポーツを統括する部局として2018年4月に設立されました。これまで課外活動であった部活動を「全学の資産」へと組み直し、大学とスポーツチームが一体となり、スポーツを通じた人材育成から社会貢献活動までを統括する部局です。特に注力したいと考えているのは、地域との連携です。「スポーツ」や「健康」をキーワードに、つくば市民の皆様と一体となり、つくば市を盛り上げていきたいと考えております。現在コロナ禍の中では、限定的な活動しかできませんでしたが、学生の心身共のサポートから、今からできるスポーツを通じた新たな地域貢献のあり方を日々模索しております。

NE XT 次回は、筑波大学スポーツアソシエーションの弘山勉さんです。「皆様ご存知のとおり、筑波大学を26年ぶりに箱根駅伝本大会に導いた監督です。スポーツを通じた地域貢献について、常に議論させてもらっている間柄です!」

BATON
07

体育系
大林太朗さん

昨年のNHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺〜」では、東京高等師範学校(現・筑波大学)を舞台に金栗四三が主人公となりました。私は、体育系の真田久教授の下でドラマの時代考証(スポーツ史)を仰せつかり、また陸上競技部の学生とともにエキストラのランナーとして「出演」を果たしました。といっても、時間にして約0.8秒ですが(汗)。今後は、この貴重な経験を通して得られた史資料やネットワークを活かし、一世紀前のいだてんに思いを馳せながら、本学の教育研究活動に尽力したいと思います。

金栗を追いかけて



NE XT 次回は、事業開発推進室の藤元健史さんです。「ドラマ放映に合わせて本学で開催された「嘉納治五郎・金栗四三特別展」の企画で大変お世話になりました。バトンを託します!」



(2019年11月撮影)

最近山登りに出かけるようになりました。山登りといっても、体力がないので低い山にしか登りませんが、ゆっくり歩いて、山の空気を吸うだけでも気持ちがいいです。山に登った次の日は、体幹が鍛えられるのか少し、姿勢がよくなる気もしています。写真はつくば市内の山、宝篋山に登った時の写真です。緑と沢の水がきれいでした。日々、自動車通勤で運動不足なので、なるべく階段を使うようにして、次の山登りに備えたいと思います。

山でリフレッシュ

BATON

04

人文社会エリア支援室
矢代真理さん

NE XT 次回は、システム情報系の水谷孝一さんです。「FD委員会でお世話になりました!とても気さくな先生です。」

いろいろ経験しています



筆者前列右から2人目

昨年度より、附属聴覚特別支援学校の寄宿舎に異動になりました。本校の寄宿舎は、スカイツリーと富士山がよく見える江戸川のほとりにあります。高等部生と専攻科生の約50人が在籍しています。以前習っていた手話が役に立ち、生徒達とも楽しくコミュニケーションしています。視覚特別支援学校勤務時代には、駒場高校との交流や筑波大学の先生のアプリ制作のお手伝いをさせていただきました。そして、人事交流でこちらの学校へ来て1年。色々な経験をさせていただいています。

BATON
08

附属聴覚特別支援学校
飯島美帆さん

NE XT 次回は、附属視覚特別支援学校の津野弘美さんです。「首学校勤務時代に、同じ生徒を違う立場で見ていた仲間です。彼女は、パラリンピックの競技でもある「ゴールボール」部の顧問で、体育館でいつもコーチングをしています。」

